

## 組織シンボリズムの方法論

高橋正泰

### 目 次

- I はじめに
- II 組織シンボリズムの視点
  - 1 理論モデル
  - 2 方法論
- III メタファーの概念
  - 1 メタファーの意味
  - 2 組織におけるメタファー
- IV 組織研究におけるメタファーの危険性
  - 1 Pinder=Bourgeois の批判
  - 2 Morgan の反論と示唆
- V おわりに

### I はじめに

組織シンボリズムには、理論とともに方法論においても特異な考え方がみられる。このことは前提とする人間観に由来している。組織シンボリズムが前提とする人間モデルは神人同形同性人モデル (an anthropomorphic model of man) であり、その人間は外部のできごとの認知と自己の認識、および言語能力をもつ人間である (Pondy=Mitroff, 1979)。この人間観は、人間の生成メカニズム (generative mechanisms) すなわち観察可能な行動を生み出すメカニズムに注目し、人間は言語、学習、意味の形成、シンボルの処理等を行うもの

原稿受領日 1985年7月24日

として扱われる。この新しいアプローチは、組織理論における研究動向つまりより多様性の低い言語を用いてより複雑なシステムを研究するという、ある意味では二律背反する研究アプローチに挑戦する一環としてみることができよう (Daft, 1980)<sup>1)</sup>。

本稿では、第1に組織シンボリズムの視点を簡単に概説し、次にその研究の為の研究フレームワークを検討する。その中心点はメタファー (metaphor) であり、メタファーの意味するところを明確にするとともに、研究フレームワーク全体と研究対象への方法論について論究することにポイントをおいている。

## II 組織シンボリズムの視点

組織シンボリズムにおいて、組織は有機体、機械というメタファーというよりむしろシアターであり、儀式、儀礼、セレモニー、シンボルによって表現される社会的構成体であることが強調される。これはオープン・システム・メタファー (an open system metaphor) から文化メタファー (a cultural metaphor) へという組織の新しいメタファー (Pondy=Mitroff, 1979) を提示することによって、組織の現実の解釈的相互作用的視点を強調しているのである。

### 1 理論モデル

組織シンボリズムは、組織の意味の創造と維持を行うシンボリック行為のパターンにその理解の焦点をおき、組織は共有されたシンボルと意味のシステムとして理解される。シンボルは意味のある関係のなかで連結されており、ある状況下で人々の活動がどんな関係にあるかを示す。このパースペクティブは個人が自分の体験をいかに理解し、解釈するか、そしてこれらが行動にいかに関連するかについて組織の分析を集中する。つまり、シンボリックな行為を通して組織創造と維持が主張される。言語といったシンボリック・モードは、

1) Daft (1980) は1959年から1979年までの *Administrative Science Quarterly* に掲載の論文を5年ごとに調べ、研究に使用される言語の多様性と組織モデルの複雑性の尺度で *Administrative Science Quarterly* における研究動向を述べている。

アプ ロ ー チ	内 容	問 題 の 発 生
構造的アプ ロ ー チ  組織目標 役割・技術	公式的役割関係、組織図のなかで描かれる組織構造は、組織の技術と環境に適するように創造される。組織は責任の配分（分業）そして規則、政策、種々の活動を調整する管理階層を形成する。	組織構造 ↑ 不適合 ↓ 環 境
人間資源アプ ロ ー チ  人間と組織の 相互依存	人々の欲求、技術、価値を、目標達成に必要な公式的役割関係とより適合させる方法に焦点をあてる。	問題は人間の欲求が抑圧されるときに生ずる。
ポリティカル ・ア プ ロ ー チ  パワー コンフリクト 希少資源の配 分	個人、集団間の欲求、パースペクティブ、ライフ・スタイルの相違によりコンフリクトが生ずる。 バーゲニング 強 制 妥 協 利害者間にコアリションがおり、問題につれて変化する。	パワーがどこに配分されるか、あるいはあまりにも広く分散しているので何か行おうとすると困難であるがゆえに生ずる。
シンボリック・ ア プ ロ ー チ  組織内の意味 意味のシステ ム シンボルのシ ステム	組織は目標、政策という側面より、共有された価値、文化として把握される。他のアプローチにみられる合理性の仮定を必ずしも前提としないで、シアター、カーニバルとしての組織を扱う。	組織は、規則、政策、管理権限というよりは、儀式、セレモニー、物語、英雄、神話によって推進される。組織はドラマであり人々は内部の演技者として従事している。内部の聴衆は、ステージでおこなっていることをもとに印象を形成する。問題は、演技者が自分のパートをうまくこなせなかったり、シンボルが意味を失ったり、儀式、セレモニーが力をなくしたとき、生ずる。

表1 組織研究のアプローチ (Bolman=Deal, 1984)

共有した現実を容易なものとし、言語のもつ重要性が指摘される。

Bolman=Deal (1984) はシンボリック・アプローチを第4の組織研究アプローチとして位置づけ、これまでのアプローチとは異なった基盤、すなわち伝統的な組織の合理性を必ずしも前提としないで、意味のシステムとしての組織を研究対象とする(表1)としている。

理論モデルにおけるメタファーは、混沌を理解可能なものとし、複雑な問題を分りやすいイメージに要約する。そしてそれらは、人間の態度、評価、行動に影響をあたえるのである。組織にとっての文化、シアター、言語ゲーム、意味形成のメタファーは、人間が組織の現実を意味のあるものとして創造するためにシンボルを活用する方法と、我々がそれを理解する理論的、実践的洞察力を生み出す。シンボルは人間行動に影響を及ぼす変数であり社会システムの機能であるという概念を超えて、そのような行動やシステムの特徴はただ単に創造されたシンボリック形態をあらわしているにすぎないという概念を研究者にもたらしめている。

## 2 方法論

組織シンボリズムにおいて、科学研究は約束(engagement)として理解される。このことは、研究者と研究される現象を結び付ける仮定と実践のネットワークを理解する重要性を強調する。そしてそれは唯一の方法の選択をするというより、理論と方法、概念と対象、研究者と研究対象の間の異なる関係をとるような約束の仕方の方法を含むものとして研究過程を考えるのである(Morgan, 1983 b, 1983 c)。

理論的、方法論的複雑性は組織分析の新しいパースペクティブの発展を容易ならしめている。組織シンボリズムの方法論的ネットワークは、パラダイム(paradigms)、メタファー(metaphors)、パズル・ソルビング活動(puzzle-solving activities)からなっている(Morgan, 1980)<sup>2)</sup>。ここでの「パラダ

2) パラダイム、メタファー、パズル・ソルビングの関係と内容については図1と表2を参照のこと。

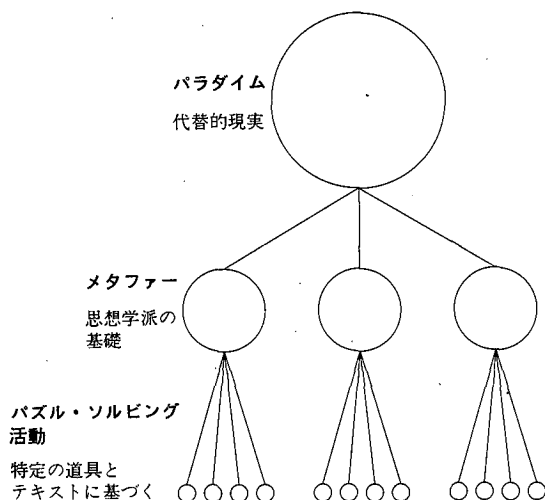


図1 パラダイム、メタファー、そしてパズル・ソルビング—社会科学の本質と組織を理解するための三つの概念 (Morgan, 1980: 606).

「イム」は、現実についての暗黙的あるいは明示的見方を示すメタ理論的、哲学的意味において用いられる。メタ理論的パラダイムすなわち世界観は異なる学派を内包しており、それぞれは共有した現実（世界の見方）に異なるアプローチ、研究方法をもっている。このレベルがメタファー・レベルである。

分析のパズル・ソルビング・レベルでは、特定の学派にアイデンティティをあたえているメタファーの示唆を細部にわたって操作化するための多くの研究調査方法が明らかにされる。多くの特定の主題やモデル、調査用具が理論家に採用される。この意味で社会科学における多くの研究調査や論争は、このレベルにおいて論じられるのである。

特定のパズル・ソルビング活動が選好された現実とそれに一致するよう選好されるメタファーにいかにか結び付けられるかを認識することによって、理論家は科学的知識の社会的構築において果たす役割をより認識することができるのである。

ここでのポイントはメタファーであり、それは認識論的立場 (epistemological

構成的仮定 (パラダイム)	特定の研究戦略の理論的根拠は、研究者の社会的世界の見方を規定する存在論 (ontology) と人間の本质に関する暗黙的あるいは明示的仮定に基づく。これらの仮定は研究実施の基礎を提供し、それによって研究者は他のパースペクティブより一つのあるパースペクティブに従って世界を考え、理解することになる。人間と生きている世界に関する研究者の仮定を明らかにすることによって、研究の基礎としての基本的パラダイムを明らかにすることができる。
認識論的スタンス (メタファー)	科学的知識は、研究者の仕事をはきうける基本的仮定を具体化しようとする研究者の方法によって形成される。通常、選好されるメタファーによって表現される社会現象のイメージは、研究調査を組み立てる特定の方法から注意を導く手段を提供する。イメージは、洞察力、理解、そして他よりも適切であると思われる説明を示唆する特定の認識論的スタンスを選好する。このように把握され、展開される異なる基本的仮定やイメージは、社会的世界についての知識に異なる基盤を提供する。
選好される方法論 (パズル・ソルビング)	イメージの詳細な側面が現象を記述する範囲において、研究される現象のイメージは検証され、そしておそらく操作化され、測定する詳細な科学研究調査に基礎を与える。イメージは、現象についての知識がえられる特定の概念や方法を生み出す。事実、方法論は現象のイメージと現実との間のギャップを橋渡しするパズル・ソルビングのデバイスである。方法論は、研究者と研究者のパラダイム、選好された認識論的スタンスによる仮定のネットワークを操作化する規則、手続、一般的プロトコール (protocol) によって研究される状況を結び付けている。
研究戦略の論理は上記のすべての要因間の連結の中にはめ込まれる。	

表2 異なる研究戦略の論理を分析する枠組み (Morgan, 1983c: 21)

stance) にある。人間は世界に関しての概念を常に発展させようとしているのであり、世界に形態 (form) をあたえることによって世界を具体化しようと試みるものである。たとえば言語、芸術、そして神話 (myth) によって人間は意味ある方法で世界を構築する。このような現実を客体化する企ては、使用されるシンボリックな構成物に基づく意味に主観的意図を包含せしめているのである。

科学理論がシンボリックな形態として構築されるという方法を理解することは、メタファーの果たす役割に注意を払うという重要性を認識することを意味する。したがって、メタファー的概念はシンボリズムの基本的モードであり、それは人間が現実の世界についての知識や経験を作り出す中心的方法なのである。メタファーの使用は研究対象のイメージを創出する (Morgan, 1980: 611)。

生成的人間プロセスとしてのシンボリズムは、人間科学 (human science) ににおける研究フレームワークとして自然科学によって描かれたメタファーを用いることの適合性に疑問をなげかける。このようにシンボリズムの本質に関するこれまでの分析を検討することによって、シンボリックなフォームにより構成され、維持される社会生活の複雑性をときほぐす新しい理論枠組みを考える必要がある。

### Ⅲ メタファーの概念

#### 1 メタファーの意味

社会を独立的に感知される現象としてあつかう伝統的な分析に社会哲学的チャレンジがおこっている。主体と客体の明確化を基礎におく従来の分析によれば研究対象と研究者は対置するものとしてみられる。しかし、ここでの分析ではむしろ見る者と見られるもの、知る者と知られるものを同種同形としてみるという新しい社会分析の立場で考えられる傾向にある (Manning, 1979)。この実証分析に対する示唆は十分評価されていない。それは多くの社会学者が研究の解釈的選択の範囲に気づいていないからである。現象学的論点は特定の主題に織り込まれる経験、行動、シンボルのなかに、言語システムを構築することにある<sup>3)</sup>。

組織分析においても同様のことが頻繁ではないにしろ論議されている。組織

---

3) 現象学的パースペクティブ内では、「外界」(the "external world")を語る唯一の「正しい」方法は存在せず、また事実が「適正な」手段によって選択され、示されなければならないということはないのである (Manning, 1979: 660)。

を単一の対象 (a single object) として把握しようと規定することは有益な方法ではない。組織と組織の知覚の間に言語によって媒介される種々の方法というものが、分析の第一歩に存在しているのである。方法論的分析は話法 (discourse) を見つけなければならない。そしてこの研究のための話法のスタイルは実証データの収集と分析において種々の役割を果たすものとして検討されなければならない。これらのスタイルすなわち比喩 (tropes) は主題分析の中心である。社会分析は創造と批判の双方を含んでいる。比喩は研究対象を構成するスタイルスティックな手段であり、それは対象を「現実的に」描写し、「客観的に」分析する限りにおいて「主張」する<sup>4)</sup>。マスター・モード (master mode) としての比喩はメタファー (metaphor)、代喩 (synecdoche)、転喩 (metonymy)、反語 (irony) からなる。

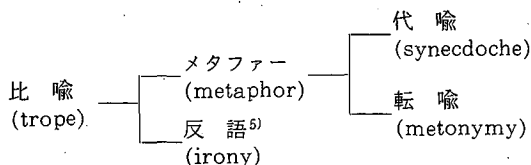


図2 比喩の関係 (Manning, 1979)

メタファーは相違の中に類似性を主張するものであり、そしてすくなくとも暗黙的には類似の中に相違を主張する (White, 1978: 72)。メタファーは転喩と代喩がうまくはたらくためのより広い原則である。メタファーの派生的位置にある転喩は王冠で王様を示すように全体をとらえ、その全体を構成する一部分に帰納する。他方、代喩は帆や船底で船を表わすように全体の一部分をみて、

4) Burke (1962) にしたがって White (1978) の示唆として、Manning は示している (1979: 661)。

5) 反語 (irony) はメタファーの肯定的に仮定する類似性にたいして、相違についての説明である (Burke, 1962: 503-517)。あるケースにあらわれる事柄をより「現実的に」説明するために対比するのであり、言語的戦略である (Manning, 1979: 662)。

6) 転喩 (metonymy) は組織をその部分 (たとえば組織内のレベル、手続きを統制する集会的規則の規模、組織スロット間、そして組織スロット内での移動率) として示し、他方組織の有機体概念は代喩 (synecdoche) である。反語 (irony) は組織を環境と対比してとらえ、組織は非合理的な均衡下にある合理的な島というように示



全体に全体の部分的徴候を演繹することを含んでいる<sup>6)</sup>。メタファー的思考は、同時にふたつかそれ以上の視点を対象に保持することによって「二重のビジョン」を維持するのである (Brown, 1976: 175)。つまりメタファーとは、まったく別の二つの経験領域を鮮明かつ図像的で、カプセルに包み込むようなイメージのなかに融解させ、それを一つのものにする手段である (Nisbet, 1969: 4)<sup>7)</sup>。また、Nisbet はメタファーについて次のように述べている。

メタファーとは、簡単にいってしまえば、既知のもので未知のものを理解しようとする方法である。…すなわちメタファーとは認知の一方法にほかならない。この方法にしたがうと、ある一つのもの独自性を示す特徴が別のものに転移する。別のものは、それがきわめて異なっているか、あるいはより複雑であるという点でわれわれにとって未知なものである。この転移は、瞬間的でほとんど無意識的な直感のひらめきによって生ずる。…基本的メタファーか否かを鑑別するためには、メタファーによって生ずる意味変形の性格が重要となる (Nisbet, 1969: 4)<sup>8)</sup>。

科学者であろうと一般的に人間は、根本的にこのようなイメージに基づいて思考するものであろう。世界を理解しようとする人間は、理解のための手がかりを求めて周囲を見まわす。彼は当り前の現実のうちからある一つの領域を選び出し、それをういてべつの領域を理解できないかどうか試みる。それゆえ、はじめに選ばれた範囲こそが基本的類比あるいはルート・メタファー (root metaphor) となる (Pepper, 1942: 38-39)<sup>9)</sup>。人間はその領域にみられるいくつの特徴をできるだけ描き出し、その領域にそなわった構造的特徴を基本概念として説明や記述をするのである。

「おそらくあらゆる科学はメタファーに始まり、代数学で終るに相違ない。またおそらくメタファーなしに代数はありえなかったろう」(Black, 1962: 242)<sup>10)</sup> という指摘は社会科学の研究方法における重要な示唆であろう。研究者

すことである。これらについては Manning (1979: 662) を参照のこと。

7) ここでの Nisbet の引用は Turner (1974: 25 邦訳18-19) を引用した。

8) ここでの Nisbet の引用は Turner (1974: 25 邦訳18-19) から若干省略して引用した。なお、引用文中の「…」の中略は筆者による。

9) ここでの Pepper の引用は Turner (1974: 25 邦訳18) を引用した。

10) ここでの Black の引用は Turner (1974: 25 邦訳18) を引用した。

が示す体系的思考のレパートリー、あるいは普通の思考方法が直接当てはまらない領域を類比的な意味の拡大によって描き出す手段がルート・メタファー（Black は「概念祖型 (conceptual archetype)」という用語を好んで用いている）であると考えられる。完全な社会的状況および文化的状況のなかに初めて考えられるとき、また変化を遂げつつある社会関係の中で拡張されたり変形されたりするとき、このメタファーが意味するものの研究はきわめて興味深いものとなる。

すぐれた思想家あるいは研究者は歴史上際立った転換期や社会上の変化といった重大な危機に現われ、彼らは多義的なシンボルやメタファーを公式として表現する。それらは多義性をおびているが、意味の核心はその当時の人間をめぐる基本的な問題と類比的に結び付いているといえる。そうした基本的な問題は生物学の用語や機械論、その他の用語を使って述べられる。預言者のような知の荒野を切り拓く思索の技術者は多義的なシンボルやメタファーを、一義的な概念と記号から構成される組織化された体系に変えてしまうのである。つまり、「変化の兆しを示すのはメタファーであり、実際に生じた変化の結末は代数によってしめくられる」(Turner, 1974: 29 邦訳24) といえるであろう。

ところで、メタファーには二つの意味が単一の語ないし句でくりつけられるが、その二つの意味はただなんとなく比較されたり、一方が他方の代替物とみなされることなく、二つの意味は互いに働きかけかつその相互作用の結果として単一の語や句が生じて一つの意味を「生成する」のである<sup>11)</sup>。Black (1962) はこの相互作用観からメタファーの特徴と性質を次のように主張して

11) 後にメタファーの危険性について述べるが、Turner (1974) はこの「生成」という用語が遺伝学的な連続性と合目的な成長、累積的発達そして発育などを示しているとし、社会的な出来事にはそのような一定の「方向性のある」特徴はみられないのでこの「生成」という意味から有機体の成長と衰退など古典的なメタファーの影響を知らないうちに受け入れ、社会的世界にみられる独特な特徴を誤って伝えてしまう危険性を指摘している。しかしこのような誤用の危険性について気づいていれば、メタファーを使用するうえで不都合はないと述べている (Turner, 1974: 30-31 邦訳27)。

12) Black の主張は Turner (1974: 29-30 邦訳25-27) から一部省略して引用した。

いる<sup>12)</sup>。

1) メタファーで表現されるものには、二つの別々のテーマが含まれる。すなわちそれは、一つの主題と副題から構成されている。「貧民はヨーロッパの黒人である」とすれば、貧民が主題で黒人が副題に相当する。

2) メタファー的連関では、主題と副題がいずれもそれ自体多義的なシンボルであるとともに意味体系の全体でもある。それらによって、さまざまな考え方やイメージ、および心情、価値、ステレオタイプが結びあわされる。つまり、ある体系の構成要素とべつの体系の構成要素とがダイナミックな関係をもつようになる。

3) メタファーは、副題にそなわった「連想から示される意味」の体系を主題に適用することによって有効にはたらく。

4) ふつうこれらの「意味」は、副題を構成する陳腐な章句から形づけられる。「科学的モデル」もどちらかといえば一種のメタファーである。

5) メタファーは、ふつう副題に当てはまる言説を主題にほのめかすことで、主題のもつ特性を選び出して強調し、さらにそれを枠にはめて組織化する。

つまり、メタファーのもつ含意、暗黙の意味および補助的な意味と、メタファーの字義との判別がむずかしいという点に、われわれが問題を新たな方法で理解できるようになる理由もあるといてよい (Turner, 1974: 31 邦訳28) といえるであろう。

## 2 組織におけるメタファー

メタファーは参加者の心の中に特定状況の客観的事実を組織化することを助長し、その代替的仮説はまさに組織の客観的事実の創造がルート・メタファーによって導かれる (Pondy, 1983: 157) ということである。公式組織においても他のタイプの社会組織と同じ多くの法則が働くとするれば、公式化されてい

13) たとえば "A is B" は単一のメタファーである。しかし長期にわたって何度もアイデンティファイされるふたつの出来事はイクステンデッド・メタファー (extended metaphor) であり、神話はこのメタファーのひとつのタイプである。神話は時間的に空間的に切り離された出来事に、長期的に拡大されたメタファー連関を創設する

ない社会における神話やメタファーを研究することによって、合理モデルに一致するよう意図的に設計されたシステムでの神話やメタファー<sup>13)</sup>の果たす役割を容易に理解できるであろう。メタファーは組織のシンボリックな現実レベルに属し、「シンボリックな現実」は「客観的現実」と対比される。シンボリックな現実は一連のパターン化された意味を構成し、状況の行為者によって社会的に構成される。所与の客観的現実によって多くのシンボリックな現実が維持されるのである。以上のように組織の現実をみること自体がシンボリック・アプローチである。そこにおいて、組織のメタファーや神話はシンボリックな現実を創造し、変換する第一のデバイスである。すなわちメタファーは状況のモデルであるとともに、状況にとってのモデルでもある (Geertz, 1973: 93)。

このように組織をシンボリック・モデルとして考えること自体が方法論的にいえば、組織についてのひとつのメタファーである<sup>14)</sup>。組織シンボリズムは理論モデルとともに方法論においてもシンボリック・モードを前提とする。したがって組織の文化モデルはひとつのメタファーであり、メタファー的概念のプロセスはシンボリズムの基本的モードといえよう。メタファーの使用は研究対象にあるイメージを与えるのである。メタファーは部分的には虚偽を含むが、効果的なメタファーは特定のイメージを解放する手段として建設的な虚偽に依存する創造的表現の一形態なのである。組織には異なるメタファーが構築されるが、それぞれは本質的に部分的洞察力を生み出すのである。メタファーがこれまでの伝統的メタファーの弱点を克服し、組織分析での相矛盾するアプローチをも克服することができるかもしれないことを組織シンボリズムは示唆しているといえよう (Morgan, 1980)。メタファーは、未知の分野でのロード・マップを提供するのである。

---

(Pondy, 1983)。

14) 組織シンボリズムのアプローチには四つのパラダイムすなわちファンクショナリスト (Functionalist), インタープレティブ (Interpretive), ラディカル・ヒューマニスト (Radical Humanist), ラディカル・ストラクチャリスト (Radical

## IV 組織研究におけるメタファーの危険性

### 1 Pinder=Bourgeois の批判

比喩の使用は管理科学 (administrative science) の発展と実務者への有益な知識を提供する妨げとなると Pinder=Bourgeois (1982) は指摘している。すなわち彼らの主張は、メタファーや他の比喩は厳しく制限されるべきであるし、組織研究は他の研究分野からの借りものをさけるべきで、学問は観察可能な組織的特徴に基づいた融通のきかない言語を使用することによってもっとも発展するということがある。メタファーの使用における危険性は、メタファー的に記述された対象がメタファーとして利用された対象の多くの明確な特徴を共有していないことに気づかないことにある。また共有された特徴に関して、類似性は何かを述べるだけでは不十分である。メタファーが同一でない実体 (entities) を相互関連づけている限りにおいて、我々はある時点においてメタファー関連を追い続けることにより惑わされることになる。したがって組織の研究には組織と組織現象の比較を通して(1)分析的分類、(2)他の分野か

Structuralist) とそれぞれのパラダイムに基づくメタファー、たとえば文化、シアター、サイバネティックなどのメタファーが示されている (Morgan et al., 1983: 17-30)。

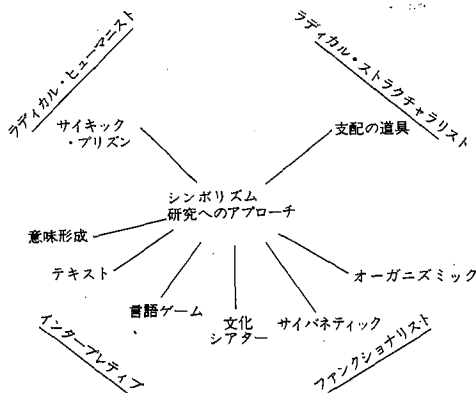


図3 パラダイムとメタファー—組織シンボリズム研究への可能なアプローチ (Morgan et al., 1983: 18)

らの借りものをさけ、組織の研究にあった戦略と技術を使うことが不可欠なのであると Pinder=Bourgeois は主張するのである。

## 2 Morgan の反論と示唆

Pinder=Bourgeois の批判にたいして、Morgan (1983 a) は次のように反論している。すなわち、Pinder=Bourgeois は

- 1) メタファーを言葉の飾りと誤解している
- 2) 科学的研究での比喩の構造的な重要性と彼らの守ろうとしている科学の特定の見方を評価していない
- 3) 科学的イマジネーションにおけるメタファーの果たす本質的、創造的役割と、メタファーは常にある程度虚偽であることを含んでいることを評価していない

という点を Morgan は指摘するのである。メタファーを科学の見方に帰するものとして考えることが必要であり、創造的で構造的な方法によって比喩的イマジネーションであるメタファーや他の比喩を認識し、それを扱うことによって科学の性質と地位の理解を修正することが必要であると Morgan は示唆している<sup>15)</sup>。

## V おわりに

組織シンボリズムの視点に立てば、科学は基本的には相互作用のプロセスであり、約束である。特定のデータによって描かれる結論は、データを解釈するフレームワークによっている。科学的研究は科学者と調査対象間の相互作用を含み、科学者の観察は直接的に相互作用の性質に関係している。同じ対象は、多くの異なる知識を生む可能性があることに我々は同意することができる。これによって、組織シンボリズムは知識を研究対象に残された潜在性と見え、潜在性の現実化に関わるものとして科学を考えるのである。

約束としての研究は、研究者と研究対象が全体の一部としてみなされなければ

15) これらの論争については Morgan (1980, 1983 a), Pinder=Bourgeois (1982) を参照のこと。

ばならないことを意味し、研究プロセスの外に立って絶対的な方法で評価することが可能であるという考え方を疑問視する。このように組織シンボリズムの研究は、生成的社会プロセスとしてのシンボリズムの本質を分析するために独自の理論的、方法論的アプローチを用いるという二重の試みに直面している。

このような方法論的視点に立脚し、組織シンボリズムは文化メタファーを主要なメタファーとして扱いつつながら、これまでの伝統的理論をファンクショナル・パラダイムの仮説を反映するメタファーによって位置づけ、パラダイム、メタファーを駆使して組織の研究をしようとしている。しかし、この組織シンボリズムの研究は1980年代に入って組織研究の一分野として位置づけられたばかりであり、今後の研究展開が注目される。

#### 参考文献

- Black, M. (1962) *Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Bolman, L. G. and T. E. Deal (1984) *Modern Approaches to Understanding and Managing Organizations*. San Francisco: Jossey-Bass Inc., Publishers.
- Brown, R. H. (1976) "Social Theory as Metaphor." *Theory and Society*, 3: 169-197.
- Burke, K. (1962) *A Grammar of Motives and a Rhetoric of Motives*. Cleveland, OH: Meridian.
- Daft, R. L. (1980) "The Evolution of Organization Analysis in ASQ, 1959-1979." *Administrative Science Quarterly*, 25-4: 623-636.
- Geertz, C. (1973) *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- Kuhn, T. (1962) *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: The University of Chicago. (中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房 昭和46年)
- Manning, P. K. (1979) "Metaphors of the Field: Varieties of Organizational Discourse." *Administrative Science Quarterly*, 24-4: 660-671.
- Morgan, G. (1980) "Paradigms, Metaphors, and Puzzle Solving in Organization Theory." *Administrative Science Quarterly*, 25-4: 605-622.

- Morgan, G. (1983 a) "More on Metaphor: Why We Cannot Control Tropes in Administrative Science." *Administrative Science Quarterly*, 28-4: 601-607.
- Morgan, G. (1983 b) "Research as Engagement: A Personal View." In G. Morgan (ed.), *Beyond Method*: 11-18. Beverly Hills, CA: Sage.
- Morgan, G. (1983 c) "Research Strategies: Modes of Engagement." In G. Morgan (ed.), *Beyond Method*: 19-42. Beverly Hills, CA: Sage.
- Morgan, G., P. J. Frost, and L. R. Pondy (1983) "Organizational Symbolism." In L. A. Pondy, P. J. Frost, G. Morgan, and T. C. Dandridge (eds.), *Organizational Symbolism (Monographs in Organizational Behavior and Industrial Relations Vol. 1)*: 3-35. Greenwich, Conn.: JAI Press.
- 中山 茂 編著 (1984) 『パラダイム再考』 ミネルヴァ書房.
- Nisbet, R. A. (1969) *Social Change and History Aspects of the Western Theory of Development*. London: Oxford University Press.
- Pepper, S. C. (1942) *World Hypotheses*, Berkeley: University of California Press.
- Pinder, C. C., and V. W. Bourgeois (1982) "Controlling Tropes in Administrative Science." *Administrative Science Quarterly*, 27-4: 641-652.
- Pondy, L. R. (1983) "The Role of Metaphors and Myths in Organization and in the Facilitation of Change." In L. A. Pondy, P. J. Frost, G. Morgan, and T. C. Dandridge (eds.), *Organizational Symbolism (Monographs in Organizational Behavior and Industrial Relations Vol. 1)*: 157-166. Greenwich, Conn.: JAI Press.
- Pondy, L. R., and I. Mitroff (1979) "Beyond Open System Models of Organization." In B. M. Staw (ed.), *Research in Organizational Behavior* 1: 3-39. Greenwich, Conn.: JAL Press.
- Turner, V. (1974) *Dramas, Field, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, Ithaca: Cornell University Press. (梶原景昭訳『象徴と社会』 紀伊國屋書店 昭和56年)
- White, H. (1978) *Topics of Discourse*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.